



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新渡戸稲造が描いた「西洋」と「日本」：近代宗教史の一断面
Author(s)	シュルーター, 智子
Citation	基督教學, 55, 14-17
Issue Date	2020-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92825
Type	journal article
File Information	02schlueter.pdf



新渡戸稲造が描いた「西洋」と「日本」——近代宗教史の一断面——

シュルター智子（北海道大学）

はじめに

新渡戸稲造を評する言葉で最も有名なものは「太平洋の橋」であろうが、他にもその人物と彼が果たした役割を解説するための端緒となる、いくつかの評言がある。例えば、近代日本思想史における「折衷主義者」という鶴見俊輔による評価はその一つであろうし、精神医学の立場から神谷美恵子が示した「うつ病者」としての新渡戸稲造という病跡学的な切り口も目をひく。また、近年の国際関係史からは「インターナショナルなナショナリスト」としての新渡戸像も提示されている。

しかし、新渡戸稲造の人物像のこうした多様さをふまえつつ、本発表ではあえて人口に膾炙した「太平洋の橋」

を出発点としたい。新渡戸自身が敷衍するところによれば、「太平洋の橋」とは「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌」、「西洋の思想を東洋に伝え、東洋の思想を西洋に伝える媒介」である。没後に出版された著作でも、「遺憾乍ら僕の書くものに後世に残るものはあるまい」としながら、「自ら通訳たるを以て天職と心得ているため、西洋のことを日本語に通じ、日本のことを外国人に了解せしむるだけ」という自己理解が披瀝される。

このような新渡戸の「媒酌」「通訳」としての自覚に着目し、本発表では、その自覚が実際には具体的にどのような形で表現されているか、いくつかの著作を手がかりにたどっていく。その際、導きの糸となるのは「日本」と「西洋」の宗教的な伝統に関する記述である。新渡戸自身、学生時代に洗礼を受けた後クエーカーとなるに至っており、「日本」と「西洋」を論じる際にも、しばしばキリスト教を中心とする宗教的伝統および宗教文化に関する記述が登場する。こうした類いの著作としてまず思い浮かぶのは『武士道』であろうが、その分析は

別の機会に譲ることにし、以下では、比較的知られていない初期の著作を取り上げること、今後の研究のための一助としたい。

1. 新渡戸稲造の生涯と著作

新渡戸稲造はその生涯で何度か外国に長期滞在しており、それぞれの時期の経験をもとに「日本」と「西洋」に関する著作が生まれている。こうした著作は想定されている読者層が異なるものの、どのタイプの著作にも「日本」と「西洋」の宗教に関する記述が確認できる。英語で書かれた著作では「日本」の宗教に関する説明に重点が置かれている一方、日本語による著作では「西洋」の宗教についての紹介が主として扱われている、ということとは当然としても、相補的な内容を含む両者を併読することにより、「媒酌」としての新渡戸稲造とその宗教的な自己・他者理解の輪郭をとらえることが可能になるのである。

2. 「日本」の宗教を描く

アメリカ留学中に執筆された論文を元に出版された『日米関係史』（一八九二年）は、五章構成のうち、第四

章「日本におけるアメリカ人およびアメリカの影響」と第五章「アメリカにおける日本人」で、日本とアメリカにおける宗教的な事象が論じられている。日本におけるプロテスタント伝道については、「なんらかの形によるキリスト教が究極的にこの国を征服することは、かなり見込みがある」としながら、「宗派代表間での団結の欠如、いな、彼ら同士間の敵意さえみられる点」を批判し、「原始キリスト教」への回帰を訴えている。また、日本人による「キリスト教の研究」は、「失望の泥沼（不可知論）のぬかるみに導くことも、キリスト教的先知説（ユニテリアン主義）の天上界の高みや精神的キリスト教（クエーカー派）の神秘的な深みへに導くこともある」とされる。ドイツ語による博士論文『日本土地制度論』（一八九〇年）は、日本における土地所有の制度と利用に関する研究であるが、第一部の冒頭で日本および日本における農業の神話の起源について言及している。さらに、宗教が「農業を相当に促進させた」側面もあり、農業に対する仏教の影響について「日本における仏教は、経済的にはヨーロッパにおけるキリスト教と同じように相当に寄与

した」としている。ただし、畜産の普及が妨げられたのは、仏教が原因というよりも、家畜が労働力として利用されたこと、牛馬の輸入が遅かったことなどの実際的な理由によると結論づけている。

3. 「西洋」の宗教を描く

『帰雁の蘆』（一九〇七年）は、四四歳で第一高等学校校長に就任した新渡戸がその約一年後に日本語で出版した著作であり、留学時代の話を中心に「西洋」における種々の経験をまとめた一般的な読み物である。宗教に関する記述には批判と賞賛が混在している。たとえば、渡米した新渡戸がアメリカ社会のいたるところで「宗教の力」を感じながらも、「宗教の機関が余りに立派」で豪奢な様子に、「僻み根性かは知らんが、何んだか新約聖書に載せてある宗教とは別物のやうな感」じがしたというエピソード（第七六話）が紹介される。その一方で、新渡戸が汽車の中である乗客に対してスペンサーに依拠した宗教進化論を話していると、聴衆が集まり、「米国でも中流以下の輩」が新渡戸の「靈魂だの未来だのと云ふような」話に熱心に耳を傾けたことに感心した、と

述べる箇所（第五話）もある。また、ボストンで参加した交霊会の報告（第四一話）では、新渡戸が交霊会での出来事について「迷信」と割り切れずに煩悶する様子が描かれている点で興味深い。本書では他にも新渡戸とクーカーの出会い（第七八話）が描かれており、後に自らフレンド派に入会する新渡戸が、いかなる点にその信仰の魅力を感じているのかを読み取ることができる。

本書の末尾では「忠孝論」（第九九話）と題して、ドイツ留学中の出来事が紹介される。ヴィルヘルム一世死去の際に下宿先の子供たちが自分の祖父を亡くしたかのように泣いているのを見て、「これこそ真の忠」と感じたとという新渡戸は、西洋の「愛が君に対して現はるれば忠、親に対して現るれば孝、日本純粹の教は之と同様に『誠』一つ」と論じ、「ナンダか耶蘇教の教訓と、日本古来の教訓と案外類似したもんぢやないか」という感想を記している。

おわりに

新渡戸が「日本」と「西洋」について論じた内容を検討していくと、一方ではそのコントラストを強調し、他

方ではその共通性に着目するという（おそらくは『武士道』にも通じる）論法を、その都度の文脈に応じて用いていたことが分かる。また、アメリカにおけるキリスト教と心靈主義、クエーカーの信仰に対する評価からは、新渡戸自身の宗教的な立場が自ずと立ち現われてくる。本発表で見てきたように、新渡戸は生涯にわたり「媒酌」たる自負のもと、「日本」について、また「東洋」と「西洋」について国内外に精力的に発信してきた。こうした活動は、十九世紀から二〇世紀初頭の近代国家における「国民文化」構想の一端を担うものと見ることが可能である。こうした文脈のなかで、新渡戸の著作と活動を今後さらに検討していきたい。